ボラの根感謝祭　基調講演「僕の考えるボランティアのカタチ」　阿部 尚明

こんにちは。

秋田県の鹿角市に住んでいる阿部尚明、25 歳です。

僕は筋ジストロフィーという障害を持っています。

お腹を前に突き出した、ペンギンみたいな歩き方で歩いていた時期もありましたが、今は何一つ自分ではできず、痰の吸引、食事、排泄、車椅子への移乗など、全てにおいて人の手を借りなければ生活できません。

そんな僕にとって、ヘルパーさんやボランティアは生活を支えてくれる大切な存在です。今は母と暮らしていますが、将来、親元から離れ地域で自立した生活を送りたいと思っているので、これからもっと彼らの協力が必要となるでしょう。

そこで、ボランティアを探すため隣の大館市にある大学や鹿角市内にある高校などに声を掛けてみようと思っています。最初は自分のためですが、僕以外にもボランティアを必要としている人達がいると思うので、鹿角市にも「ボラの根」を根付かせたいと思っています。

今日はここでボランティアについて勉強し、参考にしたいと思います。

ボランティアと関わって体験した事とは違うのですが、僕の心に印象深く今も残っている体験を話したいと思います。

それは、中学生のとき家族旅行で沖縄に行った時の事です。知人の招待で、浦添市の夏祭り「てだこ祭り」を観に行きました。大きな競技場のある運動公園で行われたもので、人が集まる行事の際には必ず踊られる伝統舞踊エイサーを観たのを憶えています。祭りの会場に着くなり、浦添市の「仲西中学校」のバスケ部の人達を紹介されました。20 人位いて、有名人になったような歓迎で驚きました。彼らもエイサーを踊る事になっていて、出番待ちの間、みんなで僕を囲むようにして代わる代わる車椅子を押し、夜店をまわってくれました。喉の渇きを気遣ってジュースを買ってきて、どのようにして飲むのかを聞き僕のカバンから取り出したストローを入れて飲ませてくれました。露店で売っていた沖縄の特産なども買ってきて、「これ、おいしいから食べてみて」と口に入れてくれました。

初対面なのに、前から知っている友達のようでした。

その様子を離れたところから見守っていた母は、喜んで泣いていました。

小、中、高とずっと健常者と一緒の学校に通いましたが、同級生にこのような事をされた事は一度も無く、初めての体験だったので涙が出る程嬉しく、今も時々思い出します。

彼らの何人かとは、今も連絡を取り合っています。

もうひとつ、紹介したい話があります。

それは、やはり中学生のとき、沖縄で知り合って友達になった女性の体験談です。彼女は脳性麻痺で、ペンを口にくわえて字を書いていて、当時まだ人工呼吸器をつけておらず、食事や字を書く事が自分の手でできていた僕にはとても重い障害に見えました。その彼女が、友達に介助してもらいながら短大を卒業したというのです。家族からの介助しか知らなかった僕は信じられず、しかし興味を持ったので詳しく話してもらいました。彼女から聞いた話を本人の言葉通りに紹介します。

◇友人の文章をそのまま抜粋◇

私は高校卒業までは、ずっと養護学校だったので短大だけは行きたいと思っていました。私が通っていた短大は「沖縄キリスト教短期大学」です。私は家から短大に通いました。短大入学、1 ヶ月半は、母が付き添ってくれました。トイレや食事の介助をしてもらうため、休み時間のたびにそばに来てくれました。

5 月のオリエンテーションキャンプが慶良間島であって、母も一緒に参加しました。母と私は別々の部屋で、眠る時以外はそばにいてくれました。しかし、途中で母がダウンして寝てしまい、意を決して友達に頼んで手伝ってもらいました。みんな快く手伝ってくれました。いつまでも母に頼んでついてきてもらったら、母が倒れてしまう、と思うようになりました。慶良間島から帰ってきてから学生課の障害者の担当の職員に、友達にトイレや食事の介助を教えながら学生生活を送りたいと伝えました。職員の方から「頑張って！」 と励ましの言葉を頂きました。そ

れからです。送り迎えだけを両親に頼み、校内では友達に頼むようになりました。最初は職員の方にトイレ介助の仕方を教えました。次に友達に教えました。授業ごとに友達が替わるので、慣れるまで朝、授業に向かうときは職員の方と一緒に教室まで連れて行ってもらいました。そして講義がすべて終わり、下校時に職員の方のところにいき、「無事、出来ました。又明日」と挨拶することが日課になりました。

短大 2 年になると、友達も沢山できて、朝、帰りの職員への挨拶もわすれ、友達が居る学生食堂へ直行するようになりました。周りのみんなの理解と協力によって短大生活 2 年間を過ごすことが出来ました。

以上のような話を聞いて、僕は驚き、目から鱗の落ちるような思いでした。

彼女とは今も連絡を取り合っています。

多趣味で、活動的な人で、英検一級を受験するなどいつも新しい事に挑戦している話を聞いて驚き、僕にもできる事はまだあると励まされています。

最近驚かされたのは、スキューバダイビングを始め年に一度は海に潜っていると聞いた時です。

彼女の話や、僕自身の先程お話しした体験やそれ以外の体験から、沖縄は福祉が進んでいるのか、風土や環境が育んだものなのかはわからないけれど、沖縄の人達は、障害者と自然にさりげなく接する術が身に付いていると感じました。

ここで、今日のテーマ「私の考えるボランティアのカタチ」に移りますが、ボランティアというのは、「よし、やるぞ！」と意気込んでやるものではなく、今言ったような自然でさりげないもので良いのではないでしょうか。

僕はそうあって欲しい。

ボランティアにもいろいろあって、痰の吸引のような医療行為、食事や排泄など、やり方を教わって何度もやって慣れなければならない事、練習も準備もいらず気持ちさえあればすぐにできる事がある。

例えば、電車でお年寄りに席を譲る行為、話し相手になってあげる事もそうでしょう。街でお年寄りや障害者を見かけたら、「何か手伝う事はありませんか？」と声を掛けることもその一つ。僕もそういう風に声をかけられ、手伝ってもらい助けられた経験がたくさんあります。自分から声を掛けて手伝ってもらえる人もいるでしょう。でも、自分から声をかける勇気がない人、迷惑にならないか、断られたりしないかと相手や周りの事を人一倍胃が痛くなるくらい考える人がいて、手伝って欲しくてもどうする事もできず、我慢や無理をしたり困ったりしている事もある。そんなとき、声をかけられればそこで初めて何かをお願いする事ができます。お願いされても手伝ってあげられなかったり、「大丈夫です。ありがとう。」と言われる事もあるでしょう。

しかし、それに懲りず声を掛けて欲しい。その時はできなくても次回はできるかもしれない。それに手伝ってもらえれば助かるが、たとえできる事が何も無くてもその行為と気持ちが嬉しいのだから。いきなりは難しいかもしれないけれど、怖がらず、恥ずかしがらず実践してみて欲しい。その際、僕たちも心がけなければならない事がある。それは、感謝すること。

ただ手伝ってもらうだけでなく、心から「ありがとう」の言葉を口にする事で喜んでいることが伝わるのだから。それによって、次に繋がっていくのだと思う。

僕だけかもしれないけれど、やってもらう事に慣れてくると、やってもらう事が当たり前になりがちで、感謝の気持ちを忘れてしまっている。それでは、関わってくれている人と良い関係を築く事ができない。普段お世話になっている人達に僕ができるのは、感謝の気持ちを伝える事だけなのだから。

それを忘れないようにしたい。

最後になりますが、この場を借りて、母やヘルパーさんといった僕に関わってくれている人達に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

いつもありがとう。そして、これからもよろしくお願いします。

今日は、このようなかたちで、僕の日頃思っている事をお話しする機会を与えて下さって、ありがとうございます。

2007/7/14